



個性叢書第三篇

青
い
帯

杉
村
け
い
子
歌

短歌新聞社版

長風叢書 第三十三篇

昭和四十八年八月二十日

歌集 娘と共に

著者 羽部鶴子

久喜市本町五丁目四番八号

発行者 鈴木十糸

発行所 古径社

浦和市元町二丁目二六番二三号

振替東京七二八五二

電話浦和(32)二三〇三

製作 新曜社

定価 一二〇〇円

序

杉村けい子さんというのはペンネームで、本名は川畑加寿さんといい、そのお母さんはすぐれた女流歌人であったかの川端千枝さんであります。やはり血はあらそえぬとでもいうのでしょうか。杉村さんも大変よいすじを持っていて、このように一冊の歌集にまとめられたのをみてゆくと、さすがにすぐれた資質をみせたいい歌がたくさんあります。

最近この歌集と相前後して、「川端千枝の憶い出」という、母を偲んでの回想記が出るようになっていますが、お母さんの生涯をなつかしくふりかえり、またその作品の背景をしみじくと追憶した、まことに味わいの深い文を綴っておられます。杉村さん自身、いつの間にか齢をとられていくにつれて、次第に短歌が境涯の想いを述べ、日々の生活感情を反省、処理し、且つそれを表現していくのに、もうかくことの出来ないものにな

って来ているものと思われます。もっと立ちいって言えば、いまはさらに生きてゆくですが、あるいは生甲斐そのもの、ともなつて来ているのではないでしようか。

杉村さんの人柄は、しとやかで、やさしく、それでいて内にしやんとしたところを持っている。地味でひかえめのようにでいて、なか／＼積極的ではっきりしている。総じていえば、つつましくしっかりしていて、その上聡明な、美しい心の持主、とでもいえばあたるでしようか。そこで、その歌風を一言でいうことはむずかしいのですが、このような人柄というものがその作品に実によく出ている。人と作品とが実によく一致しているのです。そしてこの人の作品の強みは、文学的な、とか、短歌的な、といったようないわゆる既成によりかかっていない、自分の眼で、自分の心で直接に把握、発想するところにある。抽象に進む場合でも、リアリティというものを決して喪っていない。それは生活というものを、落着いて、ていねいに、じっくりとみているからであります。たとえ日常茶飯事であっても

それは現象の表面だけをなでるのでは決してなく、その内部を、その底にあるものを、しずかに深くみつめている。生活の真の意味、あるいは生活の中の詩、といったものをしっかりと掴もうとしている、といってもよいかもしれません。要するに、どの歌も借りものではない、杉村さん自身の声そのものであるところがよいのであります。作品をすこしく辿ってみますと、たとえば、

釘の頭きれいにそろえ汗あえて画布を張りいる時を足らえり

昏るる頃まで朝顔の花ひらきいて曇り日はふかき彩をたもてる

くりやにて瀬戸もの砕けし音の後澄みて深まる静寂に在り

等、なんでもないことがこのように、ふかく、しずかに心情を通した表現となるのであります。還暦をこえたご夫妻は、現在浦和でコバルト画房という画材を売る店を営んでいるのですが、もちろん、次第にこういった歌から素材の振幅は拡がり、またすこしずつ心象の抽象化と、表現の大胆で自由な展開がはじまります。

金環蝕の極まりしとき身の内に刻みて止まぬ音をききおり

バクハツしたのは金アミの上のとうもろこし少女の膝の仔猫の丸い眼

失せものいず雨ふる窓にたたずみてコールマンの死を甘く聴く

などから「牡牛の神様」の一連や、「ノイローゼの春」、「連続もよう」などの歌になると、もう川端千枝にはなかったおもしろさ、新しさが顔を出してきます。

死にたくない牡牛通げれば何処までもどこまでも追いかける人間わいわい

追いつめられて牡牛飛びこんだ鏡やの店先青空のこつばのみじん

ああ重い 何もかも重い 緩漫な生活今日はお経のテムポ

天くらく垂れつづきたる日の果ての変貌青き鏡に視たり

鋭さは言葉とならずいちはやくひるがえりゆくうしろをみたり

黄の絵具が売れてゆく朝私はまだ黒い冬の着物をきていた

ゆきずりの秋の鏡は冷やかにおとろえゆくものの象^{すがた}をうつす

ぢやらぢやらり珠数をつまぐりおんあぼきやつばくら葬う御坊の悟り

すきまからのいろいろの眼が覗いているおれんじいろの月落ちかかり

執拗にねずみの尻をかけている部屋青ぐらき落葉のうつ積

これらはちよつと眼にふれただけのものですが、ぬけばまだ／＼ある。こ
ういった方向の歌が、老いにまけまいと意欲を内にかきたてようとするも
のであると同時に、やはり親からうけついだ知的な閃きのような、いわゆ
る資質とでもいうべきものをみせているのだ、というふうに感じられてな
らないのであります。そして再びそれが、次第に深い感慨的なものにつな
がっていく。洪い、そしてきめこまかい肌ざわりと、老いへむかう心身へ
のしずかな、ふかいまなざしといったものが短歌表現されていくのです。

くりかえす日常の中刻々に変りつつあるものをみすえむ

羽搏けばそのあおり喰いざらざらと粗きも嘸みて来るか枯淡は

噴水は休止の時間水面に顔出している管の充実

野をつらぬき海につづきし昔日を底いにしずめ老いたるながれ

作品はしだいに完成度を高めます。しかし作者は病いをえて、次のような

歌を巻末近くうたっています

藤の季終らむとして花粒の地に降る音をふかく聴きたり

ばらの赤 いちごのいろの強烈をひそかに厭い病む季わたる

物なべてばやけて見えるやすらぎか眼鏡時々はずしたくなる

どうか、この歌集刊行が契機となって、健康を回復され、さらにすぐれた作歌活動が続けていかれますよう作者に希むと共に、縁あって本書を読んでいた多くの方々に、あたたかい励ましときびしい批評とが作者杉村さんに加えられますよう、お願いします。最後に、このすぐれた歌集の刊行を、まったく予期しなかったおどろきと喜びとをもって、みつめているであろう一人のあることを、つけ加えておきます。それは、地下の川端千枝さんでありますよう。

昭和四十二年一月十五日

加藤克巳

目次

序

加藤克巳

浦和にすみて	三
青む梢	一七
狂い時計	二
懐古の唄	二六
明日につづく	三
春の氷雨	四〇
束の間の世界	四三
秩父にて	四七

空の表情		一三
彗星はみえない		一八
ホンコンフラワー		二四
凶の御くじ		三〇
冬の海		三五
よそおう		三八
冬木立		四〇
ながき雨季		四三
秋深く		四六
見沼用水に沿うてゆく		五一
青い帯		五五
休日		五九
あとがき		六二

青

い

帯

浦和にすみて

終の地とならむか此処に住み老いてしみじみ
生きむと思う日日

此処に来て十年の余りさわりなば疼きいだし
む傷もいくつか

あきないの駈引しらず抜目なきひとには負け
て過ぎ経しいく年

埼玉弁を言いて飾らぬ学生の顧客に親しみ
み来にけり

住みつけば水道の水さえ夏に冬に肌に親しき
感触を持つ